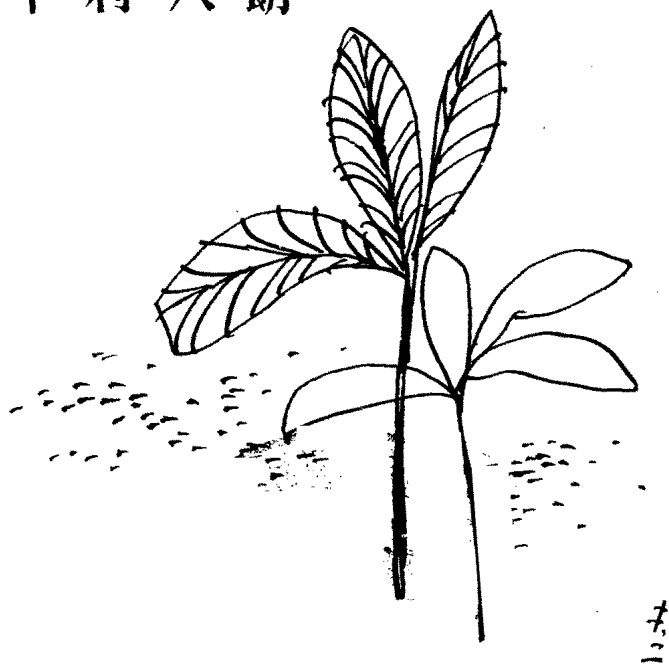


マラッカの火

中村八朗

マラッカの火

中村八朗



北辰堂版

マラッカの火

昭和二十九年十二月十日 印刷
昭和二十九年十二月十五日 初版

定価二三〇円

著者 中村八朗

発行者 千葉栄助

印刷者 西村徳次

発行者 北辰堂

株式会社
東京都新宿区津久戸町二〇
振替口座東京一四三一四二
印刷 東陽印刷製本株式会社
製本 本間製本株式会社

著者紹介

大正三年四月長野県に生る。早大仏文科卒業、十五日会々員、『文学者』同人。「桑門の街」その他の作品あり。住下所―練馬区石神井二ノ一三二三。

長編

マ
ラ
ッ
カ
の
火

中
村
八
朗

目次

第一章 敗北者……………七

第二章 狼炎……………五

第三章 策動……………三

第四章 風と雲……………一五

あとがき……………著者

跋文……………丹羽文雄

装
幀

岡
村
夫
二

マ
ラ
ッ
カ
の
火

第一章 敗北者

マラッカ海に真赤な太陽が昇ると、北部スマトラの中都市ビルの街をかこむ椰子林に朝の煙が霧のやうにたなびいて見えた。巨大なヒマラヤ杉が三角の頭を天につきさしてゐる茂みの中の兵營も炊事の煙が勢よく上つて、その煙の模様のやうなひろがり、朝陽でくつきりと浮き出してゐた。

一九四五年、八月二十日の朝だった。K 聯隊本部からは伝令が各所にとばされた。電報班は至急報を発信し、電話係は舌の根のかはかぬ呼出しに追ひ続けられた。

K 聯隊の予備隊になつて、兵舎とは道路をへだてた学校に宿営してゐる岡崎中隊にも緊張した顔の伝令が来た。中隊長岡崎大尉に十一時、聯隊長宿舎のホールに正装で集合、といふ命令だった。十五日に天皇の放送があるといふ噂を知つてゐた岡崎大尉だが、師団命令で放送は中止だと達せられてゐ

た。が、飛行隊では放送を現に聴いて居り、降伏とか、いや、玉砕を励まされたのだとか、雑音の多いラヂオの為に、何事か最後の大事な事に到つてゐるといふ予感だけを人に与へて、不安の数日を明かさせてゐたのだつた。飛行隊は放送をきいて、師団関係だけは放送を否定してゐた昨日の不明朗なきさつが、容易ならぬ事態を岡崎大尉に予覺させてゐた。

K 聯隊長花岡大佐の宿舎は、聯隊本部の東隣にある木造の洋館であつた。戦前は此の地区一帯のオランダの理事官の官舎であつた。花焰樹が大きな燃えてゐるやうな花をつけてゐる裏庭から階段を上つて入れる食堂をかねたホールにはすでに二十名程の指揮下大、中隊長達が集つてゐた。テーブルや椅子をとりはらつて広間にし、正面の客間から通ずる廊下の出口の所にテーブルが一つ据ゑられてあつた。その机の前にやがて花岡大佐があらはれるのに違ひない。

集つた将校達はいづれも熱地には珍しく上衣をきちんと着て、将校らしい整えた服装で黙念と立ちつくしてゐた。大方は今日の集りが何を意味するかを予感してゐるのだが、遠距離の警備地から自動車でかけつけて来た者はまだのみこめずに同席の人々と好奇心と不安から会話を重ねる者もあつた。

「本国は降伏したらしい」

「いや、玉砕戦ではないのか」

「派遣軍は、現地決戦と出るのはないか」

わざと他人ごとのやうにそんな会話がぼそぼそと交はされた。が、誰も進んで此の場合にぎやかに論議する者はゐなかつた。息づまつた沈黙にそれぞれたてこもつて、そんな空気を不安から破らうとする者があると、ぎろりと眼でにらんでお互に相殺し合つた。極度に不安が高まると声が出なくなるし、又他人の無神経な声音にもいらつくからだ。岡崎大尉も唯黙念としてつゝ立つてゐた。

予想はつくのである。頭のいゝ将校ならすでにソ聯が参戦した頃から今日の事は予想してゐた筈である。が、それも、どちらかと言へば、自身の運命を度外視した割に無責任な予感であつたかも知れない。今のやうにひしひしと身に應えて来るものではなかつた。今は、己達がいかにめしく将校の正装をして胸に武勲の略授を飾つて立ちすくんでみると、初めて運命感としての冷い嵐の中に立つてゐる己をしみじみと感じるのだつた。

岡崎大尉も同様の感慨に追はれた。あまり着ないので真新しい将校服、光つてゐる大尉の階級章、又は左胸に飾つた略授等が栄光を失つた滑稽なものとして冷く眼に今は感じ出した。子供らしい幼稚さと笑ひながらも栄光ある大戦のさ中に立つてゐるのだといふ感動は、今迄ともかくもかうした服装に或る誇りを知らぬ間に感じさせてゐた筈だつた。が、今は何か色あせた芝居の衣裳のやうに感じられた。それも、大当りをとつた芝居の長い興行が終つて、さて楽屋の片隅に投げられて忘れてゐたかつての主役の衣裳を借りて来たやうな、捨て難い感情が残りながら、もはや魅力と力を失つたいはゞ

滑稽なまやかしを発見さへ出来る寂しい衣裳として映るのをどうする事も出来なかつた。現金な感情だと岡崎は思つた。

花岡大佐の現れるのがおくれるにつれて、一座の中には大きな不安が再び流れ始めた。どのやうな運命が各人の上に一体展開するのであらうか。国家の光榮を背負ふ戦争には尻ごみする気持はお互に持ち合はせてゐないやうに、心に苦しい張りを保ち続けてはゐた。軍国の長い教育と、特に将校としての特殊な教育を受けた人々は、少くとも光榮ある戦闘に対する表面的な見榮は忘れはしなかつた。国民感情は平然として死地におもむく勇氣を称讃した。その劇的な勇氣に尊大に身構える術を巧みに会得した者が將校として立派に見えた。例へ、手がふるへて双眼鏡の中に敵兵を発見出来なくとも、敵弾の飛んで来る中で悠然と身を起し双眼鏡を構える事を敢えて努力せねばならぬ位置に各々は立つてゐた。そして、より平然と戦闘を実行し得る勇氣を何よりも大切な見榮とした人々である。もしも、空襲に我を忘れて防空壕に飛び込んだとしても、何かの理窟でそれが決して勇氣を失つた行動ではなかつたのだと懸命に言ひわけをしないではゐられない人々なのであつた。

今、新たなる作戦命令を受けて勝戦さの大進撃を開始する為の集合であるとしたら、人々は、例へ現在のやうな苦境であり死地に走る事が明らかであつたとしても、榮光の前に勇躍する努力を、懸命にけしかけて我と我が身を偽る事で大形な勇氣の身ぶりをする事に迫はれたに違ひない。だが、今の

此の場合の空気は、言はゞ、真の勇氣と、努力や見栄で飾る事の出来ない真底からの人間力を必要とするものらしかった。将校達は場馴れない初舞台の新しい役者のやうに戸惑つて、黙然と相手相手の態度を気にし合つてゐた。

と同時に、底を割れば、各人はこれから自分達が立たせられるであらう極めて困難な局面に処理すべき幾多の難事を思ひやり、言ひ知れぬ恐怖と不愉快さがこみ上げて来て腹立たしくなるのだつた。と同時に、その不快さの後から、ともかく砲煙が遠のいた安全感を意識して、ふと故国の血族の上にも思ひは飛びもした。然し、果してスマトラ軍は無血降伏を決行するであらうか。血族を思ひ出すとそんな不安が心を暗くした。突差の人間らしい心の動きだつた。

「聯隊長殿がお見えになります」

聯隊副官安藤少佐が正面の廊下から出て来て一同に告げた。将校達はそれぞれ列を正して待つた。五十才の半ばを過ぎた老大佐がうつむきかげんで紙を手にして正面に現はれた。大隊長の發言で敬礼がなされた。大佐はテーブルの前に立つた。

「只今から、詔書と命令を伝達いたします」

老大佐の声はふるえを帯びてゐた。一同は射るやうに花岡聯隊長の顔を見つめた。聯隊長はうやうやしく紙をひろげた。手が、指が日頃の威厳を失つて小刻みに動き紙の鳴る音がしんとした空気の

を伝はつた。

岡崎大尉は目をつぶつたまゝ、のどにからんだ花岡大佐の朗読の声音をきいた。名文句がばらばらになつた想念をつぎ合せるやうに耳に來た。予覚が大きかつただけに特別の感慨も湧かなかつた。

「負けたよ」とあつさり一声音はれたら、かへつてむつと涙ぐんでゐたかも知れなかつた。詔書が終つた。又紙の鳴る音がした。岡崎大尉はやはり眼をつぶつたまゝだつた。

「命令、八月十九日二十三時、於テメダン。師団ハ血涙ヲ飲ミ戰鬪ヲ放棄セントス……」

花岡大佐の声がかすれて激んだ。岡崎大尉はふと目をひらいて聯隊長の顔を見た。ギロリと大きい大佐の目が真赤に充血して涙がはふり出た。声が止つて次の命令文が読めなかつた。大きな効果が上つて、一座はしんとしまつた。若い士官学校出の將校達は、待つてゐたやうにすゝり泣き出した。そんな中で大佐の鼻をすゝる音と命令書の紙がかすかに鳴るのが断続した。將校達皆はひそかに頭をたれた。大佐の様子が正視に耐えないものを与へた為もあるが、こんな場合は、よく訓練された將校達は同様に大佐の悲痛が我が胸に伝はつて來て感動するらしかつた。いや少くとも、形だけはさうしなければ空気に合はなかつた。岡崎大尉はすゝり泣いて命令の中途でどもつた老大佐の顔をしげしげと見つめてゐた。大佐と共に感動して泣けない冷いものが胸にあつた。これからの困難を極めるであらう事態が逸早く予想されて來てゐて、泣いてなんかゐられなかつた。又、心の一方では、いきり立つ

事だけ知つてゐる師団司令部で、よく戦闘放棄の命令を出したものと、ほつと安心する氣持が強かつた。『降服と定つたのだ』強く胸に岡崎は言ひきかせた。『生きれる』烈しい感情が劇的な聯隊長のすゝり泣きを無視して彼の胸に湧いてゐた。『生きれる』『生きよう』と。

スマトラ軍は終に戦闘を放棄した。と同時に降服時の最も有利な態勢を逸早くとらうとして各部隊を早急に民情の一番よい安全な中部スマトラの農団地帯に集結を命じた。

部隊の移動計画が血眼になつて計画された。ばらばらに残されて捕虜になつては大変だといふ氣持が、一兵の胸にまであわたゞしいはやる心を渦まかせた。K聯隊主力は一週間以内に移動をする旨が発表された。蟻の巢をこはしたやうなすさまじい混乱がK聯隊の上にかぶさつて來た。

2

岡崎中隊は聯隊の命令にもとづいてせはしい移動準備が始められてゐた。同時に本部も、又は此の地区の警備隊である井川中隊も、その他、通信、歩兵砲中隊、野砲隊等の聯隊本部直轄部隊もすべてが限られた三日以内のめまぐるしい慌しさの中に移動の準備を開始したのである。

一切の書類、及不必要なものの焼却が企図された。個人的な日記、写真の類も、部隊の行動を秘密にするといふ目的で焼却が命ぜられた。部隊内のあちらこちらに時ならぬ火の手が上り紫の煙が林立

した。兵隊は働き蜂のやうに働きまはつた。

外部の軍政部及關係商社の日本人達も、それぞれの系統を通じて移動準備を開始せねばならなくなつた。軍隊とちがつて生命の危険に直面する事に馴れない之等の人々は、狼狽と疑懼の中に血眼になつて、如何にすれば我が身を最も有利にし得べきかといふあがきにとらはれてゐるやうだつた。

其の日の夕刻、B 29の巨体が百米程の低空でピルンの街の上空に飛来した。焼却の煙がたなびく空の夕陽を受けて、その巨体は美しく金属的にかゞやいた。兵隊達も、やうやく不安の動搖を見せ始めた住民達も、思はず美しい巨大な飛行機に見とれた。夕陽に反映するその巨機の胴体からバツと無数の伝單が撒布された。ひらひらと空一面にひろがつた伝單は空中を舞ひ、街にも兵營にも落花のやうに降つて来た。

インドネシア語のビラには、日本の無條件降伏がつぶさに書かれ、インドネシア住民の日本軍に対する協力を嚴禁してゐた。そして、日本軍より不当な取扱ひを受けた者はその事実を聯合軍、(近く上陸する英軍)に対して申告する事が要求されてあつた。と同時に、日本軍の拘束から開放された住民に対して幸福を予約してゐた。

日語で書かれたビラには、主として兵營の上空で撒布されたのだが、天皇陛下がすでに降伏を命ぜられたのであるから、すべての日本軍は平靜且つ従順にその命令に服従すべき事を命じてゐた。平靜